

コロナ禍における学生海外派遣プログラムの事例報告

—ICT 活用で拓く持続可能でウェルビーイングな国際交流—

立松 大祐, 玉井 輝之

愛媛大学教育学部

Running a Study Abroad Program during Covid-19 : Developing a Sustainable Program through Innovative Uses of ICT for Students Wellbeing

Daisuke TATEMATSU, Teruyuki TAMAI

Faculty of Education, Ehime University

1. はじめに

2020年初頭の新型コロナウイルス感染症拡大により人の移動が制限され、大学においても学生が往来する国際交流は中止を余儀なくされた。愛媛大学のUWBダイバーシティと教育実践プログラム（以下、UWB研修）も渡航直前の2020年2月に実施を中断した。その後、国内外の大学はICTを活用したバーチャル・エクスチェンジ、COIL、ブレンディッド・ラーニングなどのオンライン学習プログラムを開発し、学生の国際交流を行ってきた（新見・星野・太田，2021）。愛媛大学においても、ワシントン大学バセル校（UWB）とのCOILを2021年度と2022年度に実施してオンラインによる学生同士の国際交流を図ってきた。ICTの活用によりオンラインでの交流や留学の機会が生み出され、それらに参加する学生は一定数あるものの、実際に海外に赴き対面での学びを求めている学生も多いことは明らかであった。

そこで、2023年3月にUWB研修を再開させるべく、2022年6月末に説明会と参加募集を始めて間もない2022年9月、新型コロナウイルス感染症に関する水際対策緩和（2022年10月11日以降適用）の発表により、水際措置は大幅に見直された。例えば、新型コロナウイルスへの感染の疑いのある症状がある帰国者・入国者を除き、入国時検査は不要となった。また、入国後の自宅又は宿泊施設での待機や待機期間中のフォローアップ、公共交通機関不使用

等は免除された。ただし、全ての帰国者・入国者はWHOの緊急使用リストに掲載されているワクチンの接種証明書（3回）、または、出国前72時間以内に受けたPCR検査等の陰性証明書のいずれかの提出が求められることになった。アメリカを往復する場合は、この水際措置が該当し、この大幅緩和の発表により学生を海外に派遣することについての実現可能性がより高まった。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、教育の学びを保障する手段としての遠隔・オンライン教育などを行うために、ICTは基盤的なツールとして注目されている（中央教育審議会，2021）。今後起こり得る新たな感染症に備えるためにも、平常時でも児童生徒や教師がICTを積極的に活用することが求められている。そして、ICTの活用をすることで、海外との交流など今までにできなかった学習活動の実施や学校外での学びの充実にも有効であると考えられている。このような教育におけるICTの活用の需要の高まりから、2022年度から教職課程を履修している学生は、「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法」に関する科目を受講することが必須になった（文部科学省，2021）。2023年3月のUWB研修では、教員を志望している学生が6人中6人であった。そのため、UWB研修の様々な活動でICT活用をする体験をさせることは、学生の教員の資質・能力を育成するために必要であると考えた。

本稿では、新型コロナウイルス感染症の水際対策が緩和

された状況における、2023年3月に4年ぶりに実施された学生海外派遣プログラム（UWB 研修）について、コロナ禍での対応とプログラム内容について報告する。特に、持続可能でウェルビーイングの実現を目指すプログラム内容とICT活用の事例を報告する。参加学生は、教職大学院の1回生2人、教育学部の1回生3人、同2回生1人であり、シアトルには2023年3月6日から3月19日まで滞在した。

2. コロナ禍でのアメリカ渡航のための対応

2.1 渡航前の対応

新型コロナウイルス感染症の水際対策の緩和により、外国へ渡航する機運は上昇するが、日本国内においては毎日のコロナウイルス陽性者数の報道もあり、学生はマスク着用や手指消毒、検温などの感染症対策を徹底している状況であった。一方、2022年当時のアメリカでは、ウィズコロナまたはアフターコロナの生活として、マスク非着用をはじめとする新しい生活様式が報道されていた。しかしながら、本研修の運営を依頼している、ワシントン大学シアトル校（以下、UW）付近に構えるNPO団体FIUTS（Foundation for International Understanding Through Students）によると、学生のホームステイの受け入れについて、新型コロナウイルス感染症への恐れによって2週間ではなく1週間しか受け入れできないホストファミリーがある可能性が伝えられた。また、研修前にオンラインツールを使用して交流をしていたUWBの学生の様子から、依然としてマスク着用の学生が少なからずいることが確認され、アメリカの人々の中にも慎重に感染症対策に取り組む姿が見られた。

本研修への参加者が決定する2022年10月において、アメリカ入国の際には原則的に新型コロナウイルスワクチンの2回接種証明があれば隔離措置の必要はないということであった。また、日本への帰国時（入国時）には、ワクチンの3回接種証明または出国前72時間以内のPCR検査等での陰性証明が必要であった。研修は個人旅行ではなく、集団で行動するのが基本であることから、スムーズなプログラム運営と出入国手続きを実現するため、研修参加者にはワクチンの3回接種を要請した。

本研修では事前学習会を実施し、そのなかでも新型コロナウイルス感染症の予防と対策、渡航に向けての必要な手続きの説明は丁寧に行い、学生のアメリカ渡航への安心と安全への意識を高めるよう心がけた。まずは、基本的な感染回避行動としての手洗い、手指消毒、マスク着用、3密（密閉、密集、密接）を避けることである。マスク着用については、新型コロナウイルス陽性者と対面で接していても、マスク着用をしている場合は濃厚接触者として認定されず大きな行動制限を受けることがないという状況があっ

たためである。次に、学生には健康状態報告書（図1）への記入を求め、渡航前から渡航終了まで日々の体温とコロナ様症状の有無をセルフチェックするよう指導した。さらに、学生と引率教員は全学で実施された危機管理セミナー（愛媛大学国際連携推進機構・愛媛大学リスク対策室主催、2023年1月30日開催）に参加して通常の危機管理とコロナ禍における危機管理について学び自己管理の意識を高めた。

	7日前	6日前	5日前	4日前	3日前
日付	27-Feb	28-Feb	1-Mar	2-Mar	3-Mar
体温(Fever) (朝・晩に○をつける)	朝・晩 °C	朝・晩 °C	朝・晩 °C	朝・晩 °C	朝・晩 °C
症状 (problem) (問題)	特になし (nothing) 咳(Cough) 鼻水 (Runny nose) のど痛 (Throat hurts) だるさ(Tired)	特になし (nothing) 咳(Cough) 鼻水 (Runny nose) のど痛 (Throat hurts) だるさ(Tired)	特になし (nothing) 咳(Cough) 鼻水 (Runny nose) のど痛 (Throat hurts) だるさ(Tired)	特になし (nothing) 咳(Cough) 鼻水 (Runny nose) のど痛 (Throat hurts) だるさ(Tired)	特になし (nothing) 咳(Cough) 鼻水 (Runny nose) のど痛 (Throat hurts) だるさ(Tired)
その他の 症状					

図1 健康状態報告書（一部）

学生が大学・学部における手続きとして、学部提出する「新型コロナウイルス感染症の影響下における海外渡航についての誓約書」があった。これは、外国渡航をする学生への注意喚起を促す目的があり、学生は誓約書の内容を読み、それに続く渡航先（アメリカ）への渡航前に確認すべき項目に必要な事項を回答した上で署名し、修学支援システムで提出をするようになっていた（資料1）。

学生が次に行うのは、新型コロナワクチン接種証明書アプリ（2021年12月20日から公開されている日本政府公式アプリ）に、自分自身のワクチン接種記録を登録して日本国内用と海外用の接種証明書をアプリで発行することである。さらに、新規に2022年11月から導入されたVisit Japan Webへの情報登録である。これにより、事前にWebサイトで税関申告の情報を登録し、日本到着後に電子申告端末にQRコードをかざすだけで申告できるようになった。各自のPCやスマートフォンなどの端末で旅券番号などの税関申告情報に加えて、ワクチン接種証明書を事前審査のために登録する。図2は、事前の検疫手続き審査が終わり、ワクチン接種済みであることと入国後の待機が不要であることを示す画面の一部である。これに続き、青地に白抜き文字で「現在のステータス 審査完了 青」と表示され、氏名、旅券番号、生年月日、到着予定日が記されている。これは、日本入国時に空港の検疫職員に提示するものである。

航空機への搭乗前には、アメリカ政府およびCDC（アメリカ疾病予防管理センター）への情報提供（PROOF OF COVID-19 VACCINATION FOR NONCITIZEN NONIMMIGRANTS, PASSENGER DISCLOSURE AND

ATTESTATION TO THE UNITED STATES OF AMERICA) として、航空会社の搭乗手続きカウンターに所定の情報の提出が必須となっていた。



図2 Visit Japan Web による検疫手続事前登録

2.2 渡航中の対応

アメリカへの渡航中の対応として、まずは、検温、アルコール消毒、マスク着用、健康調査などの基本的な感染予防対策を渡航前から継続させた。学生はそれぞれに体温計を持参し、ホストファミリー宅にて朝夕2回の検温をした。それに加えて、研修場所への集合の際には非接触式電子温度計にて学生の検温を確かめた。次に、運営支援の依頼をしている FIUTS との規約により、アメリカ入国後の抗原検査と帰国時の抗原検査を実施した(図3)。新型コロナウイルス感染症への対策としてこれらの対策を講じて研修を実施した。



図3 抗原検査キット(筆者によるもの)

学生は2人1組で現地の家庭でホームステイを行った。ホームステイが始まりまもなく、ホストファミリーから新型コロナウイルス陽性者が出た。そこに滞在する学生2人は家の中ではマスクを着用せずに過ごしていたため、濃厚接触者になった。そのことが判明して引率教員がFIUTSに連絡したのは夜間であったが、FIUTSは事前決めていたとおりに濃厚接触者となった学生2人をホテルに移す手続きをした。その日のうちに学生2人は引率教員が滞在するホテルとFIUTSのオフィスに近いホテルに移動し、健康観察をすることになった。念のために、学生のホテル滞在は5泊を予定し、毎朝必ず抗原検査を実施して引率教員が確認することにした。ホテル移動後の翌日午前の抗原検査では2人ともに陰性であり、コロナ症状も確認されなかったが、午前中の研修プログラムにはWeb会議システ

ムを活用して遠隔で参加した。同日午後の検査においても陰性が確認されたため、午後からは他の学生と合流しプログラムに参加することができた。ホテルをチェックアウトする前にも陰性を確認したため、その日から学生2人は新しいホストファミリー宅でのホームステイを再開することができた。この一連の出来事は他の学生にとっては新型コロナウイルスの感染予防意識を一段階引き上げることにつながった。例えば、現地の大学生はマスク着用なしの傾向が多く、高校生はほぼ着用なし、小・中学生は場面に応じての対応をしているなか、交流の際には愛媛大学の学生は常にマスクを着用している状態であった。

3. 研修プログラム

「UWB研修」は、2011年に開発された「UWB多文化共生体験学習プログラム」(立松・小助川・ボグダン, 2019)の内容を踏まえて、参加学生のニーズに合わせて発展してきた研修である。例えば、立松(2020)では、小学校教員志望学生の参加の増加を踏まえて、異文化間能力と英語スピーキング能力の向上を研修目的に加えたプログラム内容を報告している。白井(2020)は、OECDのミッションは貧困などの格差問題に配慮しながら全体としての成長を目指す方向へと変化しており、経済指標の高まりだけでなく、人々が心身ともに幸せな状態(ウェルビーイング)を作り出すことに移行していると報告している。ウェルビーイングの指標には、住居、収入、仕事、地域社会、教育、環境、市民参加、健康、生活満足度、安全、ワークライフバランスの11個のトピックが挙げられている(OECD, 2013)。本研修プログラムのテーマはダイバーシティと教育であり、学生はプログラムを通してウェルビーイングの基盤となる基本的な知識を身に付けることができる。また、新型コロナウイルス感染拡大に伴い学校教育においてICT活用が急速に広まり、教員志望の学生には教育でのICT活用スキルが求められるようになった。そこで、2023年3月実施のプログラムは、ICT活用を意識したプログラム内容と実施方法を含むようFIUTSと共同作業で作上げた。事前学習会として、プログラム内容に関する学習を10月から週1回90分で18回実施した。そして、今回の研修では、5つの項目「多文化・多様性の理解と尊重に関すること」、「多様な人々との連携・協力に関すること」、「コミュニケーションや教育におけるICTの活用に関すること」、「ホームステイに関すること」、「その他(英語学習、学生交流など)」についての目標を立てさせた。

プログラムの概略は次のとおりである。アメリカでのダイバーシティを学ぶために、まずはアメリカ文化について広く学ぶためのワークショップを行った。キャンパスでの性的マイノリティなど共生社会を学ぶため、UWのQ Centerを訪問した。Q Centerは性的マイノリティの学生

や教職員が安心や安全を感じる心地の良い場所として運営されている。

経済的格差による就労の不公平さに対応する取組として、Vera Project への訪問と Work ED とのオンライン学習の機会をもった。Vera Project は主に音楽や芸術を通して若者にそれらの産業についての知識やスキルを身に付けさせようとする団体である。Work ED は、プログラミング学習などを通してあらゆる年齢の子もたちに、将来性のある進路を選択できるために必要なスキルを身に付けさせ、自立を促すことを目的として運営されている。さらに、経済的支援が必要な家庭へ食料品や日用品を届ける Redmond Box Lunch Program でのボランティア活動に参加するなど地域社会での取組について体験的に学習することができた。

アメリカ社会の人種問題を考えるため、アジアの人々がアメリカで直面している差別や不合理な処遇などを展示している Wing Luke Museum の見学と、かつては日本人町が形成されていた International District のガイドツアーへ参加し、第2次世界大戦頃までにシアトル市内で生活していた日本人の暮らしぶりなどを学習した。戦争時の日系人への弾圧などの歴史について、シアトル市内からフェリーで40分程度にある Bainbridge Island を訪問し、当時、日本人・日系人であるという理由により強制的に捕虜収容所に送還され、帰還してきた語り部の老人から多くを学んだ。また、ネイティブアメリカンの歴史や文化を学ぶため Hibulb Cultural Center Museum を訪れ、文化の多様性について学ぶことができた。

教員志望者の学生にとってシアトル近郊の学校を訪問し、各学校の授業の取組を観察したり、児童・生徒・学生と交流したりすることは異文化間能力 (Byram, 2008) や共生社会への理解を高めるために重要である。TOPS K-8 School は UW に近接する小学校であり、学校長から講話をしていただいたり、学生の質問に答えていただいたりした。また、聴覚障害のクラス担当者とコーディネーターから手話について実技を交えて教えていただいた。2年生の教室では、学生は日本の小学校と小学生の生活について、事前に準備したスライドや映像で児童に紹介した。その後、折り紙ワークショップを行い、イースターが近いため児童と卵とうさぎを折りながら交流をした。その後、カフェテリアに移動して児童と同じ給食をいただき、校長先生との談話を通して児童の多様性に対応する小学校教育について理解を深めることができた。Thornton Creek Elementary への訪問では、校長先生の案内で図書館やグラウンドなどの施設を見学し、3年生の児童を対象に日本の小学生の1日の様子と折り紙ワークショップを行った。図4は小学生からのメッセージである。Soundview Elementary は、中学生も在籍している国際バカロレア認定校である。かつて神戸の認定校で勤務経験がある教員のクラスにも訪問する

ことができた。学生は2人1組で俳句と折り紙のワークショップを行った。学生は休み時間に児童生徒と校舎外で一緒に遊ぶなりして交流をすることができた。高等学校は Ingraham High School を訪問した。受け入れ担当教員との生徒の進学についての懇談の他、各学生のバディとなる生徒とともに授業を受けたりカフェテリアで食事をしたりなど高校生体験を行い、折り紙ワークショップをして交流を深めた。大学はUWBの2つの日本語クラスへ訪問した。参加学生は松山市や愛媛大学の紹介に続き、俳句の説明をしてUWBの学生と俳句作りに挑戦する俳句ワークショップを行った。

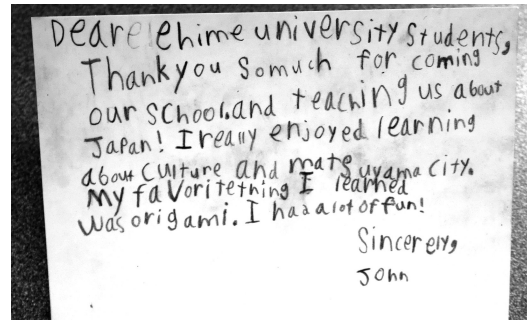


図4 小学生からのお礼のメッセージ

学校訪問以外の教育についての学びとして、OneWorld Now! という高校生の放課後学習や外国語学習、さらには留学の機会を提供している団体への訪問がある。団体の活動趣旨などの説明を受けた後、会員の高校生10数名とWeb会議システムを使用して意見交換を行ったり、簡単なアラビア語を学んだりすることができた。もう一つは、Committee for Children からゲストスピーカーに FIUTS のオフィスで Social Emotional Learning について学ぶことができた。社会性と情動性のための学習のことであり、児童生徒が自尊感情や対人関係能力を築くためのトレーニングなどの内容は、教員志望の学生にとっては知っておきたい知識であった。

これらの学習内容は参加学生のウェルビーイングにつながるものと考えられる。なかでも多様な人々との出会いは、それをさらに高めることになるはずである。特に、ホームステイで出会ったホストファミリーは、学生に安心感を与えながら異文化などについて多くを学ばせてくれた。プログラムで学習した内容について意見交換をしたり、いろいろな施設に学生を連れて行ったりなどを通して相互理解を深めることができた。次に、FIUTS がアンバサダーと呼ばれる UW と UWB の学生を愛媛大学の各学生に配置してくれたことである。正規の学生や留学生と属性は異なるが、それぞれが対応可能な時間に参加学生と時間を共に過ごし、交流を深めることができた。さらに、FIUTS のスタッフは UW に留学や研修でやって来るさまざまな国の学生と日々接しており、多様性への知識と態度が身に付いており、参加学生に自然な態度で温かく接している。ス

スタッフ自身もいろいろな背景のある人物である。例えば、今回の研修プログラムにおいて学生と長い時間を過ごしたスタッフは、ウクライナ出身である。学生にウクライナの美しい国土や文化、ウクライナへの思いについて熱く語っていただいた。また、レバノンの政情不安から夫婦でアメリカに移住してきたスタッフは、学生に年齢が最も近く、いつも親身になって学生のホームステイの悩みや相談事に応じていただいた。学生に英語のレッスンをしていたスタッフは性的マイノリティであり、自然な態度で自分のことを学生に理解させていた。

ホストファミリー、アンバサダーの同世代の学生、FIUTSスタッフとの研修を通した付き合いは、互いにとって印象的で大きな出来事である。研修終了後6カ月以上経過していても、SNSを通じて頻繁に交流を続けている学生がいる。また、ホストファミリーのご子息の友人が松山市内でALTとして勤務していることを知り、その方と交流をしている学生もいる。また、シアトルでアンバサダーを務めたUWB学生は、2023年3月と8月に愛媛大学を訪れ、互いに友好関係を深めるなどしている。研修で実際に人と出会うことを起点に、SNSを効果的に活用して人間関係を広め深めるような持続可能な学生交流を実現している。

4. 研修プログラムにおけるICT活用

ICTを活用した実践事例を報告する。ただし、従来の学校教育で実施されていた、ICTを使い資料を提示する実践については本報告では言及しない。

4.1 ICTを活用した実践1（学習支援）

事前学習においては、LMS（Learning Management System）のアプリケーションであるTeams（Microsoft社製）を使用した。事前学習を都合により欠席した場合、ファイルを開覧して教師と学生、学生と学生が情報共有をするために活用した（図5）。

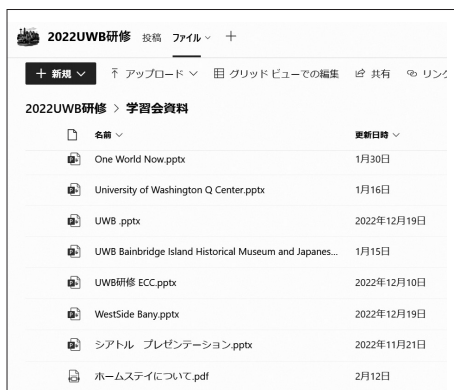


図5 LMSを使用した情報共有の例

4.2 ICTを活用した実践2（海外交流）

学生の海外での交流経験として、高等学校で海外交流を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で断念した学生がいた。このように、海外交流の経験が少ない状況であった。そのため、Web会議システムであるZoom（Zoom Video Communications社製）を使用してUWBの学生と国際交流をさせた（図6）。学生からは、「日本と海外とのマスクの着用状況の違いを知ることができた」や「渡航前にコミュニケーションがとれて楽しかった」などの会話があがっていた。このことから、渡航に対しての感染予防対策の準備を進める手立てとなったり、コミュニケーションへの不安を軽減させたりする実践であったといえる。



図6 Web会議システムを使用した交流の様子

Web会議システムを使用した交流の後には、UWBの学生とSNS（Social Networking Service）の連絡先を交換し、渡航前に学生同士の交流ができる環境を整えることができた。渡航中も学生同士が連絡を取り合い、本来は愛媛大学の学生のみが参加する研修プログラムに、UWBの学生が参加する機会があった。さらに、渡航後には、UWBの学生が愛媛大学に国際交流に来日し、愛媛大学の学生がホストとして迎え入れる機会があった。このように、持続可能な国際交流のために、SNSを使用させることができた。

4.3 ICTを活用した実践3（管理・連絡）

研修プログラムについての活動の記録をさせた。2018年度以前のUWB研修では、紙媒体の行動目標記録表を使用していた（立松等，2019）。この記録をフォーム作成ツールであるGoogle Forms（Google社製）によりデジタルで記録させた（図7）。この結果を教師と学生が共有できるようにした（図8）。ホームステイ先に帰宅した後に、毎日このフォームを使用して記録をさせ、記録内容を即時共有できるようにした。これまでの、紙媒体とは異なり、お互いの不安や充実感など心身の健康状態を把握して翌日の研修プログラムに参加するという、家庭での学びが研修プログラムでの学びに繋がることを体験させることができた。

振り返り*				
○テーマに関すること				
○ホームステイに関すること				
○その他 (英語学習, 学生交流など)				
	達成できた	やや達成できた	やや達成できなかった	達成できなかった
テーマに関する こと	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
ホームステイの 目標	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
その他	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
記録*				
目標に対して達成できたことや課題, 新たな目標などを具体的な出来事とともに記録すること。				
1日の出来事できる範囲で詳細に記載してください。				
回答を入力				

図7 フォーム作成ツールで記録した例

4.4 ICTを活用した実践4 (授業実践)

研修プログラムにおいても、対面での活動とWeb会議システムを使用した活動を併用することも体験させた。Work EDの活動については、担当者からの説明や質疑はWeb会議システムで行った。OneWorld Now!での活動では、対面での活動で知識や理解を得た後、Web会議システムを使用した活動に参加し、同年代の学生同士の意見交流を行った。また、上記「2.2 渡航中の対応」にも述

べたように、学生が新型コロナウイルスの濃厚接触者となり対面での活動に参加ができない場合に、Web会議システムを活用して遠隔で参加させた。このように、Web会議システムを使用した学習を通して、多様な学びの場を確保し学びを保障することを体験させることができた。

4.5 ICTを活用した実践5 (学習評価)

研修プログラムの学生の自己評価については、行動記録と同様にフォーム作成ツールであるGoogle Formsを使用した。回答結果は、個人ごとにまとめて表示できるようにした(図9)。この自己評価のデータを学生が共有することで、帰国後、留学体験の報告の場であるStudy International Fair 2023のポスター作成に活用させた(図10)。また、FIUTSが実施したプログラムの評価もGoogleFormsを使用して実施され、個人ごとにまとめられた(図11)。デジタルデータとして記録させることで、他の活動にも活用できることを体験させた。また、GoogleFormsを活動の記録や学習評価で活用することで、1つのICTのツールの使い方を工夫することで学習活動に応じた使用ができることを体験させることができた。

	<p>多文化・多様性の理解と尊重に関すること</p> <p>○多文化や多様性に触れ、どのような文化や風習があるのかを学び、自分も相手も尊重することができる相互尊重の心を育てることができる</p> <p>多様な人々との連携・協力に関すること</p> <p>○多様な人々との連携・協力により、自分自身の視野を広げ、物事を多面的に見ることができ、また協調性を身につけることができる</p> <p>コミュニケーションや教育におけるICT活用に関すること</p> <p>○現代の海外におけるICTを活用した教育の在り方を学び、これから目指すべき教員像や学校教育について考えを深めつつ、大学での学習に活かすことができる</p> <p>ホームステイに関すること</p> <p>○初めてのホームステイでの経験を通じて、コミュニケーション能力を育むと共に、適応能力を身につけることができる</p> <p>その他 (英語学習, 学生交流など)</p> <p>○英語学習, 学生交流など様々な場面で、「実用的な英語」を習得することができる</p>				
2023/03/01	<p>は</p> <p>達</p> <p>成</p> <p>で</p> <p>き</p> <p>な</p> <p>か</p> <p>っ</p> <p>た</p>	<p>達</p> <p>成</p> <p>で</p> <p>き</p> <p>な</p> <p>か</p> <p>っ</p> <p>た</p>	<p>や</p> <p>や</p> <p>達</p> <p>成</p> <p>で</p> <p>き</p> <p>な</p> <p>か</p> <p>っ</p> <p>た</p>	<p>UWBの日本語クラスの方々と交流会をし、最後の学習会を終えた。遠隔の会話であったためなのか、会話が難しく感じ、伝わらないこともしばしばあった。実際にシアトルに行って、自分自身の伝えたいことが上手に伝えきれないことも多々あると思うが、伝える努力をしつつ積極的にコミュニケーションをとるようにし、また分からないことや聞き取れなかった時はそれを素直に伝えるようにしたい。今日、最終確認として荷物や安全ガイドブックについてのお話があり、期日も着々と近づいてきているため、忘れ物のないように準備を進めていきたい。</p>	

図8 行動記録を共有した例

氏名	
多文化・多様性の理解と尊重に関すること(振り返り)	1
理由を記述してください。(多文化・多様性の理解と尊重)	シアトルでのプログラムや生活を通して、予想以上の多文化・多様性の学習ができたから。特に心に残っていることは、FIUTSでのEnglish classである。どの文化や伝統が世界に共通しているのか、文化で異なるのか、個人によるものなのか分別する作業を通して、国によって人によって分け方が大変異なることを理解した。また、アンバサダーやFIUTSのスタッフとのコミュニケーションを通して日本と異なる習慣を実感した。日本では、日常会話で自分の意見を求められることはほとんどなく、相手の話に共感したり、聞くだけだったりすることもよくある。しかし、シアトルでは個人の意思を尊重することが主で、常に自分の意見や考えを持つことが会話を展開させていくうえで大切なことだと感じた。話を聞いて自分なりの意見を持つということは、それだけ話の内容を理解し興味を持っている気持ちを示すことができるのではないかと考えた。また、もし意見が異なると共感をしなければ否定もしない感じであった。アメリカは多国籍の国ということもあって、たくさんの方と話すことができた。日本にいると味わえないグローバルゼーションを体験できた。異なる文化があれば不思議に思うだけでなく、こんな文化もあるのだと理解し吸収することができた。
多様な人々との連携・協力に関すること(振り返り)	1
理由を記述してください。(多様な人々との連携・協力)	特に心に残っていることは、UWB研修メンバーとFIUTS、アンバサダーの方々と連携・協力だ。UWB研修メンバーとは、10月から約半年にかけて活動を共にしてきた。動画の材料を撮りに行ったり、動画や資料を作成したり、研修のために一生懸命準備してきた。また、活動中の小学校でのプレゼンテーションで急な変更があっても、夜遅くまで打合せや練習をしたりして、子どもたちによりよい日本紹介ができるよう全力を注いだ。失敗も成功も経験しながら真剣に仲間と取り組んできた日々が、自分に成長の機会を与えてくれたと感じている。そして、FIUTSのスタッフとアンバサダーたちによって初めての経験を沢山させてもらった。彼らなしではこんなに充実したプログラミングにはならなかったと思う。移動時間や、ごはんを食べるときにたくさん話しかけて、シアトルのことや教育のこと、プライベートなことを沢山話しかけることができた。彼らは教育やシアトルに関して豊富な知識を持っていてどんな質問にも答えてくれた。そして相互の文化の伝達や親睦を深めることに成功することができた。

図9 UWB研修後の自己評価の例

UWB研修

ワシントン大学シアトル校・ポセリ校を拠点とする
ダイバーシティと教育実践プログラム

岡田大飛・坪内勇樹・魚本祈子
丹生谷優穂・矢野華子・山下夏奈
研修先: アメリカ合衆国・シアトル
期間: 2023年3月6日～2023年3月20日 (2週間)

研修の目的

アメリカ多文化社会と教育への理解を深め、多様な文化背景をもつ人々と連携・協力できる態度を身に付ける。また、先端ICT活用の現場を見学し、変化する学校に対応できる態度を身に付ける。
テーマ: 多文化・多様性の理解と尊重、多様な人々との連携・協力、コミュニケーションや教育におけるICTの活用

参加理由

私たちは、現地の人との交流、学校・施設訪問、ホームステイなどを通して「異文化」や「多様性」を学び、自分自身の視野を広げたいという思いからこの研修に参加した。また、今まで培ってきた自らの英語力を知り、現地の人との関わりを通じて、さらに向上させたいと思っていた。そして研修での学びを将来に生かしたいと考えていた。

多様性

〈交流〉
子どもからお年寄りまで、様々な年齢の人と交流した。私たちは日本(文化・学校・食など)や日本人(特徴・考え方など)についてお話をした。また国籍を超えた、たくさんの人や様々なバックグラウンドを持つ人と出会い、それぞれの国の状況や価値観の違い、考え方などを知ることができた。

〈Q Center〉
Qセンターでは、ジェンダーの在り方を学んだ。Qセンターは多様なバックグラウンドがある人が安全で快適な場所であり、誰もが利用できるコミュニティである。教師として、児童生徒の心の声を聞くことが大切であり、多様性を尊重し、その子自身を見るのが重要だと学んだ。学んだ今だからこそ、教育の場においてできることを考えたいと強く思った。

〈Wing Luke Museum/International District〉
Wing Luke Museumでは、日系やアジア系の人々の歴史を学習した。街を巡りながら日本人の痕跡を辿り、掲示物から、日本人による功績を知ったり戦争の悲惨さを感じたりした。博物館では、病室のベッドや血だらけの本など、迫害を受けた様子が見受けられた。時代や国は違えど、同じ生きている人間としてこのようなことは二度とあってはならないと強く思った。

〈ホームステイ〉
シアトル滞在中はホームステイをした。初めてのホームステイとても緊張をしていたが、ホストファミリーが温かく迎えてくださった。思うように英語を話すことができず、自分の思いをはっきりと伝えることがとても大変だった。しかし毎日たくさんコミュニケーションをとり、ホストファミリーと良い関係を築くことができた。帰国後には、日本に滞在しているホストファミリーの友人と出会うこともでき、かけがえのないつながりを作ることができた。

教育

〈現地の小学校3校・高等学校1校訪問〉
小学校では折り紙ワークショップを行い、卵とウサギの折り方を教えた。ICT機器や英語を駆使しながら折り方を教えることができて、今後授業実践を行う自信ができた。高等学校では現地の高校生とペアになり授業に参加をした。高校生たちと関わりながら、日本とアメリカの授業スタイル等を比較することができた。

〈UWB訪問と俳句ワークショップ〉
UWBで日本語クラスを履修している学生に俳句ワークショップを行った。事前に動画を作成し、日本の文化や俳句の作り方を紹介した。学生たちの日本語の学習到達状況は様々だったが、メンバー全員が学生とのコミュニケーションを通して、学生の伝えたいことや思いを俳句の形で表現させることができた。

〈Bainbridge Island/Japanese American Exclusion Memorial〉
Bainbridge Islandでは、日系アメリカ人の歴史を学ぶことができた。第2次世界大戦中に、日系アメリカ人の強制収容が行われていたという事実を知り、その悲惨さと平和の尊さを改めて考えることができた場所だった。私たちは、施設にあるモニュメントに折り鶴を捧げ平和を祈った。

〈Redmond Box Lunch Program〉
Redmond地区でボランティアに参加した。地元団体が協力して貧困家庭へ食料や生活必需品の提供を行っている。私たちは、食料や生活必需品の入った箱を配達する車に積んだり、箱の裏側に「Take care.」などメッセージを書いたりして支援を手伝った。現地の方との交流も深まり、充実した時間を過ごすことができた。

楽しかったことTOP3

- ホームステイ
2人ずつに分かれてホームステイをしました。ホストファミリーの家に帰宅した後休日には一緒にショッピングに出かけたりパーティーに参加したり!!帰国が寂しくなるほど、自分にとって大切なアメリカの家族ができました。
- 現地の人との交流
訪問先の小学生・高校生・大学生とワークショップを通じてたくさん関わることができました。特に折り紙は現地の小学生に大人気で、私たちのワークショップを楽しんでくれました。またアンバサダーたちと観光地に行ったり、食事をしたりしました。彼らから多様な価値観や文化の違いを学ぶことができました。
- バイク・プレイス・マーケットの観光
シアトルで最も有名な観光地。市場では豚の像やガムウォール、魚を宙に飛ばすパフォーマンスを見ました!有名なクラムチャウダーを食べ、スターバックス1号店でコーヒを飲み、シアトルの名物を味わうことができました!

大変だったことTOP3

- ワークショップの準備と実践
ワークショップの準備から常に相手意識をもって、準備を行いました。その結果、UWBの学生や小学生が悪戦苦闘しながらも、笑顔で俳句づくりを楽しんでいる様子が見られたので、達成感を感じることができました。
- 英語を使ったコミュニケーション
ホストファミリーやFIUTSのスタッフ、アンバサダーとの交流の中で、英語を用いて自らの意見を発言することが難しかったです。しかし、いろいろな人と英語で話す中で、自らの英語力を鍛えることができました!
- 自己管理・危機管理
コロナ禍での渡航となり、感染予防対策には十分注意をしました。滞在中はマスク着用や手洗い、消毒など徹底する必要があります。また、時差が16時間もあり、時差ボケにも苦しめられました…。

他にも…

FIUTS (国際交流団体)による英語レッスン、教育やICT関係のNPO団体との関わり、ディスカッションを行いました。

【研修への参加を考えている方へ】
一度きりの人生で、海外に行ける機会はなかなかありません。学生のうちにできることを十分にすることが今を楽しみモチベーションにつながります。研修を通して様々な人と出会い、友達になり、研修後も繋がりが続けられる素敵な人たちに会えるはずですよ! 研修に参加して、貴重な体験をしましょう! 気になることがあれば気軽な気持ちで私たちに聞いてください!

【費用】
総費用: 約53万円 (奨学金: 12万円) + お小遣い

航空機代	約21万円
プログラム費用	約30万円 (2200ドル)
ビザ (ESTA)	約2700円 (21ドル)
その他移動費 (バス移動)	約6400円
保険代	約6400円
パスポート取得・更新	約1万円

円安と燃油高の影響でかなり値段が高額になりました。

図10 留学体験をまとめたポスター

Q1

Please rate how valuable/exciting each of the following activities were for you (10 = Very Valuable, 1 = Not Valuable)

First day orientation	10
Workshop led by Era: U.S. culture and transition.	9
English Classes with Jason	10
Visit to UW Bothell and presentation.	9
Transferable skills workshop with UW Bothell Career Services.	7
Ingraham High School visit and presentation.	10

図11 研修プログラムの評価の例

5. 学習評価の結果と考察

研修プログラムの後、学生に自己評価をさせた。まず、目標の達成度について示す(表1)。6人中6人が、5つの項目で、肯定的な評価であった。このことから、ウェルビーイングの基盤となる基本的な知識を身に付けることに対して、意欲的に取り組めたといえる。また、達成度の理由を記述で回答させた。「多文化・多様性の理解と尊重に関すること」については、「性的マイノリティの方たちとの接し方や考え方を学んだ。」「シアトルに来て一番の発見は、自己紹介の際に自分を表す代名詞は he/him なのか、she/her なのか、立場を伝えていたことだ。訪問先で出会った人が、自らそれを伝えたり、メールの署名に書き加えていたりしていたので、現地の方々の多様性に関する理解がより進んでいるのだと感じた。」などの記載があった。「多様な人々との連携・協力に関すること」については、「レッドモントのフードバンクでのボランティア活動では、ボランティア団体のスタッフの方たちとコミュニケーションを通して、連携・協力しスムーズに活動することができた。」「私はこう思う」といった自分の意見を述べる時も、Yes/No とともに明確な理由をつけて話すことが難しかった。」などの記載があった。このように、学生がそれぞれの学習状況に応じたダイバーシティに対する新たな知識や考え方を身に付けられているといえる。

「コミュニケーションや教育における ICT の活用に関すること」については、「アンバサダーやホストファミリーとのコミュニケーションではスマートフォンを多く使用した。スマートフォン内の写真を見せたり、わからない単語を検索したりすることで会話がスムーズになった。」「SNS もたくさん活用できた。例えばアンバサダーたちと連絡先を交換し、現地でやり取りを頻繁に行い、帰国後も継続してやり取りをしている。」などの記載があった。このように、ICT の効果的な活用としてコミュニケーションにおいて使用したことが経験できたといえる。一方では、教育での活用については、「パワーポイントの画面とカメラの画面をうまく使い分けながら折り紙を紹介することができた。」という提示する活用方法についての記載があった。このように、学生に ICT を活用する経験はさせられたが、学生がその効果的な活用については十分に理解できていないままの使用になっていることが課題として残された。

次に、事前学習についての自己評価を示す(表2)。6人中6人が肯定的な評価であった。その理由を記述で回答させた。「初めての海外で分からないこともこの事前学習で毎回確認できたので良かったです。」「オンライン交流では、UWB の学生たちと Zoom で交流を行った。事前に学生の様子や日本語の学習状況などを知ることができ、現地であった際は、再会を果たしたかのような感覚だった。」などの記載があった。このように、事前学習によって学生

の海外渡航への不安の解消や、Web 会議システムを効果的に使用した交流の一助になっていると考えられる。また、「やや内容は十分であった」と回答した学生は、「研修内容については、もっと深い内容まで調べることができ、プレゼンを聞いている側ももっと理解することができていれば、実際に研修の中で訪問した時にも更に深掘りをした質問ができたと思うし、私自身もっと多くのことを学べたと思う。」というような、研修での学習をより深めるための視点からの振り返りができていた。

表1 目標の達成度の自己評価

	達成できた	やや達成できた	あまり達成できなかった	達成できなかった
多文化・多様性の理解と尊重に関すること	6人	0人	0人	0人
多様な人々との連携・協力に関すること	5人	1人	0人	0人
コミュニケーションや教育における ICT の活用に関すること	2人	4人	0人	0人
ホームステイに関すること	5人	1人	0人	0人
その他(英語学習, 学生交流など)	5人	1人	0人	0人

表2 事前学習について

	内容は十分であった	やや内容は十分であった	やや内容は不十分であった	内容は不十分であった
事前学習の内容に関すること	4人	2人	0人	0人

最後に、新型コロナウイルス感染症への対応についての自己評価を示す(表3)。6人中6人が、肯定的な評価であった。その理由を記述で回答させた。「ワクチンを打ったりマスクをして行動したりすることで、事前にコロナへの警戒心を持ったりリスクを回避するような行動を取ったりすることができた。また、抗原検査や体温の管理を行うことで、自分自身の健康確認もすることができた。」といった、事前に研修をしておいた感染回避行動の徹底を心掛けられた記載があった。一方で、「ホストファミリーと過ごしている間は少し気が緩んでいて、晩御飯の前後にマスクを外して一緒に過ごしている時間帯があった。」といった、

表3 新型コロナウイルス感染症への対応について

	感染回避行動ができた	やや感染回避行動ができた	あまり感染回避行動がとれなかった	感染回避行動がとれなかった
新型コロナウイルス感染症への対応について	2人	4人	0人	0人

引率教員がいない場所での活動への注意喚起の方法の困難さが課題として残された。

6. まとめ

本報告では、まず、コロナ禍における学生海外派遣プログラムについて、渡航前の必要な手続きや渡航中の感染回避行動などについてまとめた。次に、ダイバーシティと教育プログラムの概要を紹介し、本プログラムを通してウェルビーイングを実現できる可能性が高いことと、学生交流の持続可能性を説明した。さらに、研修におけるICTの活用方法の実例を示した。事前学習から事後学習まで、とりわけ双方向のコミュニケーションを行うためのツールとしての活用例の概要を説明した。学生交流におけるSNSの使用は、今後もその活用の機会が増えることが予想され、持続可能な学生交流を実現するために欠かせないものとなるであろう。今回の研修において、学生は学校などでプレゼンテーションを行う機会があり、その際、事前に準備した動画やスライドを活用するという主に提示型のICT使用であったが、今後はプレゼンテーション時にもフォーム作成ツールを使用するなど双方向で意見交換などができるダイナミックな活用方法が期待される。

総務省(2017)は、学生の短期海外留学の学びの成果に対して、短期間ではグローバル人材育成に資する力が身に付かないという立場を示していたが、総務省(2020)では短期留学についてもグローバルに活躍する人材の育成に資すると転換し、短期留学生を増加させるよう政策へ反映させている。ICT技術が発展した社会では、外国とのオンライン交流だけでもその達成目標によっては一定の成果は期待されるであろう。たとえ2週間程度の短期留学であっても、実際に多様な人と出会い、自分の目で見て触れて学び、その場で生身の人と外国語でコミュニケーションをとることなどはグローバル人材育成の礎になり、参加学生や周囲の多くの人にとってウェルビーイングを作り出すことに結びつくであろう。

Dweck(2006)は、人間に備わっている能力は変化しないものではなく、自分の能力は一生懸命に努力し伸ばすことができると信じる成長マインドセット(growth mindset)を提唱している。海外研修においては、学生に成長マインドセットをもたせ続けることが必要であり、事前学習から事後学習までを含む約6カ月の体験的学びを、学生の自己成長に結びつけることができるかが大切である。つまり、研修を通して学生のもっと学びたいという動機づけを高め、「困難なことや新しいことに挑戦する」「失敗してもくじけない」「批判から学ぶ」「他人の行動から学びを得る」など、成長マインドセットに導くことが研修目標達成の要因の1つであると考えられる。学生が海外で学び、自分の変化や成長を実感でき、研修後の生活において身に

付けた知識や技能を多くの人のウェルビーイングの実現のために発揮することができるよう、今後の研修内容と方法の開発にさらに努力したい。

謝辞

本研修は、JASSO、愛媛大学学生海外短期派遣・受入プログラム支援事業、愛媛大学教育学部から支援を受けた。また、研修実施に協力していただいたFIUTSスタッフ、ワシントン大学教職員・学生、シアトル市の方々に感謝の意を表す。

引用文献

- 白井俊(2020).『OECD Education2030プロジェクトが描く未来の教育—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—』ミネルヴァ書房。
- 新見有紀子・星野晶成・太田浩(2021).ポストコロナに向けた国際教育交流—情報通信技術(ICT)を活用した新たな教育実践より—『留学交流』120, 26-41. https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2020/_icsFiles/afiedfile/2021/04/19/202103shimmihoshinoota_2.pdf (最終確認日2022年9月1日)
- 総務省(2017).「グローバル人材育成の推進に関する政策評価〈評価結果に基づく勧告〉」https://www.soumu.go.jp/main_content/000522826.pdf (最終確認日2022年9月1日)
- 総務省(2020).「グローバル人材育成の推進に関する政策評価〈評価結果の政策への反映状況(2回目のフォローアップ)の概要〉」https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/hyouka_200623.html (最終確認日2022年9月1日)
- 中央教育審議会(2021).「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf (最終確認日2022年9月1日)
- 文部科学省(2021).「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行等について(通知)」https://www.mext.go.jp/content/20210514-mxt_kyoikujinzai02-000014994_1.pdf (最終確認日2022年9月1日)
- 立松大祐・小助川元太・ボグダン・デイビッド(2019).「シアトルにおけるダイバーシティ研修の試み—7年間の実践を通して見たプログラムの有効性と可能性—」『大学教育実践ジャーナル』17, 47-54.
- 立松大祐(2020).「小学校教員志望学生のための異文化理解と英語運用能力の育成を図る海外研修」『大学教育実践ジャーナル』18, 61-67.
- Byram, M. (2008) *From foreign language education to education for intercultural citizenship: Essays and reflections*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Dweck, C.S. (2006). *Mindset: The new psychology of success*. Ballantine Books.
- OECD (2013). OECD better life index. <https://www.oecd.org/better-life/>

oecdbetterlifeindex.org/#/11111111111 (最終確認日2023年8月29日)

OECD (2018). *Education2030: The future of education and skills. position paper*. [https://www.oecd.org/education/2030-roject/contact/E2030%20Position%20Paper%20\(05.04.2018\).pdf](https://www.oecd.org/education/2030-roject/contact/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf) (最終確認日2022年9月1日)

Poter, M., Stern, S., and Green, M. (2015). *Social Progressive Index 2015*. <https://www.socialprogress.org/static/b11e8918ae3b7edf007e9343965b650b/2015-social-progress-index.pdf> (最終確認日2022年9月1日)

資料1 「新型コロナウイルス感染症の影響下における海外渡航についての誓約書」と別紙「渡航先（アメリカ）への渡航前に確認すべき項目」（抜粋）

教育学部長 殿

新型コロナウイルス感染症の影響下における海外渡航についての誓約書

私は、愛媛大学生として海外渡航するにあたり、移動中を含め渡航先では自分自身で安全を確保しなければならないことを理解し、自覚と責任を持って、安全と健康に十分な注意を払うことを誓います。そして、下記の事項を承諾・厳守することを誓約することをもって渡航を希望します。

記

1. 渡航先が新型コロナウイルス感染症の影響により 外務省による 感染症危険情報 レベル1（十分注意）であることを確認し、自らの判断と責任で渡航します。なお、大学としては、現在海外渡航を「不急の渡航は自粛を要請」としていることを承知しております。
2. 渡航先における新型コロナウイルス感染症への感染については、自らの責任として対処します。また、発生した医療費・治療費はすべて自己負担で対応します。
3. 渡航先政府からの指示や在外公館からの通知に注意をはらい、現地の法令を遵守するとともに、責任のある行動をとります。また、日本政府又は愛媛大学から渡航中止や帰国の勧告・指示・命令等があった場合、それに従います。
4. 別紙「渡航先（アメリカ）への渡航前に確認すべき項目」を確認のうえ、回答内容のとおり情報収集し、理解しました。愛媛大学とはいつでもすぐに連絡が取れるようにしておくことを約束します。
5. 渡航開始から再入国完了（日本での水際対策措置の完了）まで、状況について、指示された方法（教育学部チームへのメール送付：edgakumu@stu.ehime-u.ac.jp）に基づき報告します。
6. 日本では海外渡航・出入国について厳しい水際対策・制限が実施されていることを認識しています。
7. 現在、アメリカは再入国拒否国・地域に指定されていませんが、今後の状況によっては、予定通り再入国できない可能性があることを理解しています。また、それによる修学上の問題（授業に出席できないことで単位が取得できなくなる等）が生じる可能性も含めて承知しています。
8. 再入国後、渡航国・地域やワクチン接種状況によっては、空港周辺の宿泊施設で一定期間の待機及び健康観察が必要となり、その場合、検査費、宿泊費、それに伴う移動費、雑費はすべて学生本人が負担しなければならないことを理解しています。※大学からの支援・補助はありません。
9. 上記については、保証人（もくは保護者）にも説明し同意を得ています。

渡航先（アメリカ）への渡航前に確認すべき項目

このことについて、以下のとおり回答します。

(1) 渡航先における最新の感染状況について

回答：新型コロナウイルスの感染症危険情報について、世界の感染状況が総じて改善してきていること、G7各国も既に国・地域別のレベル指定を取り止めていること等を踏まえ、10月19日付けで、全世界を一律レベル1（十分注意してください）としている（外務省海外安全ホームページ）。

(2) 渡航先への渡航手段及び国内移動手段について

※帰国時の航空券も手配済みか、またその便が運行中止となった場合の対応（キャンセル料負担、別便の手配等）についても検討しているか

回答：大学生協を窓口には航空券および国内移動のバスの手配をしている。運航中止になった場合は、大学生協に別便の手配を依頼し、加入している学研災付帯保険（東京海上日動）に連絡する。

(3) 渡航先への入国の可否及び入国に必要な手続きについて

回答：米国への入国に際しては、18歳以上の非移民である非米国市民に対し、ワクチン接種証明の提示が義務付けられる（外務省海外安全ホームページ）ので、ワクチン接種後に新型コロナワクチン接種証明書アプリを入手し、情報の登録を行う。

(4) 渡航先への入国時における水際措置及び入国後に取るべき行動について

回答：新型コロナウイルスワクチンを3回接種済みであり、その場合は入国の際にPCR検査などは必要ないことになっている。入国後はマスクを着用し、手洗い・手指消毒、3密を避けるなどの基本的な感染回避行動を徹底する。

(5) 渡航先において新型コロナウイルスに罹患した際に取るべき対応について

回答：医療機関の指示に従い、必要な療養を行う。引率教員に連絡し、療養機関の研修に参加できないことを伝える。隔離が必要な際は、ホテル療養をする。

(6) 愛媛大学との緊急連絡体制について

回答：基本的には引率教員が初動対応フローに従って、大学の担当教職員に連絡し、初動対応チーム、学部長、国際連携機構へと共有される。渡航開始から再入国完了の報告は、教育学部チームへのメール送付をする（edgakumu@stu.ehime-u.ac.jp）。

(7) 新型コロナワクチンの接種状況について

（渡航先によっては海外渡航用接種証明書（松山市で申請可）が必要なことを承知しているか）

回答：新型コロナワクチンの接種を3回済ませている。新型コロナワクチン接種証明書アプリに登録し、英文接種証明書をダウンロードしている。

(8) 危機管理セミナーの受講状況及び危機管理ハンドブック（国際連携課作成）の入手状況について（一時帰国の場合は除く）

回答：危機管理ハンドブックを入手し、事前学習会において熟読している。また、1月30日実施の危機管理セミナーを受講する予定であり、受講を申し込んでいる。